

令和元年度岡山県生涯学習審議会及び岡山県社会教育委員の会議第3回会議

議事概要

日 時 令和元年12月24日（火）

9：30～11：30

場 所 岡山県庁分庁舎6階共用会議室601

1 開 会

2 議 事

(1) 協議事項

- ・今までの経緯と前回会議の質問事項について
県内の家庭教育支援・子育て支援の状況
県内外のPTAの事例
- ・骨子（案）について
- ・御意見をいただきたい内容
「親の学び」の特徴や効果
「一緒に学ぶ」の特徴や効果を踏まえた取組や支援の方法
- ・研究の表題について
- ・今後のスケジュールについて

3 その他

- (1) 令和元年度の主な事業について
- (2) その他

4 閉 会

<議事概要>

- 「1開会 2議事(1)協議事項 ・今までの経緯と前回会議の質問事項について」
関係資料により事務局が説明

会長

今までの経緯から、県内外のPTAの事例について、県外と比較して気付いたことをベースに整理したとのことだ。質問や意見、感想でも構わないので何かあるか。

副会長 学校行事・PTA行事の中での活動を収集したということは理解したが、公民館活動でも活動が行われているという情報は得られなかっただろうか。

事務局 PTAの活動をベースにするという前回会議の方針の元、焦点化して調べている。優良事例や各学校単位の取組の中で、公民館などと一緒に連携している事例などはあった。また、保護者の数が少なくなり、PTCAと言う形に切り替えて、地域の人も一緒に入って運用しているという事例はいくつか見られた。

会長 公民館もこの取組と連動して、全体像としては関連しているというケースも多々あると思われる。しかし、今回は親の学びというところに焦点をあててみると、このような仕分けができたり、整理することができる。この整理の仕方は非常に面白いのではないか。

委員 もう少し、全員で共有しておいた方がいいと思うような所があった。一つ目は、「教育力の低下」とか、「家庭の教育力の低下」とかを前提として、スポットを当てた取組は多いが、本当に家庭の教育力は落ちたり低下しているのなら、その家庭の教育の中のどこが抜けているのか、どこが落ちているのか。一人一人の力を付けるようなことは前より上がっているような気がする。しかし、社会的なマナーや、生活の中で生きていくような力などが落ちているような気がする。地域の教育力、組織的、計画的なもの、例えば地域学校協働活動、コミュニティ・スクールなど、組織的なものは、上がっている気はする。しかし、近所の人が気楽に声をかけるとか、一緒に共同して、一緒に生活していくとか、そういったものが落ちている気がする。ここでいう「親の学び」というものに関連していかなければいけないが、どういう部分の力や教育力が低下し、どうしてこちらからの働きかけが必要なのか、PTA等の取組をどうすればいいか。また、どういう部分が課題なのかをはっきりさせて、それに的を得た取組を持っていくと、学んだ充実感など高まっていくと思う。家庭の教育力が落ちているのか、はっきりしないままやっても、何に取り組むのか気になった。

もう一つ、10ページの図のABCDの4つの取組の他に、例えば11ページのような支援は、地域学校協働活動やコミュニティ・スクール等の取組と、かなり密接に関連していると思われる。もし、そういった部分が、調査した中で、あれば教えてほしい。これからPTA活動の充実などを研究していくときに、この二つは外してはならないので関連があれば教えてほしい。

会長 私から回答する。重要な視点だと思う。家庭の教育力や家庭の課題というものをどのように捉え、これを前提として押さえた上でということだった。そし

て、この図のように整理をしてみると、先ほど言ったように下段のCとかDが少ない。こういうものを改善していこうということから課題を見つけ、後でまとめていこうということだった。しかし委員が言われるのは、その前の段階のその親の学び、保護者についての課題を、しっかり見ておくべきだということだ。これはもちろん重要ではあるが、今家庭が二極化傾向にあり、家庭教育に力を入れている家庭もあるし、したくてもできない、あるいは多忙で難しい家庭もあるというような二極化の傾向にあることは、皆さん御存知だと思う。そういう点では、今の家庭を巡る状況というのは、事務局とも押さえていくことも出来るかと思う。押さえた上で、参加できないということに対しての支援等は、この11ページのまとめの方に行く、取組にはどんなタイプがあるのか分類すると10ページの方になっていく形でどうかと思う。ここでは仕分けてからの考察になると思う。

もう一つのコミュニティ・スクール、いわゆる地域学校協働活動に関して、この10ページの分類を見ていくと、今までは学校支援地域本部と同じ発想で、「親の方が学んで子どもに支援する」で、大人が学んで子どもを支援していくんだという傾向が強かった。しかし、今は地域学校協働活動で、親と子どもと一緒に学んでいくという取組が重要で、県内には少ないようだ。こういうことを協議していくには、親同士の協議の場であるコミュニティ・スクールということが重要になってくると思う。事務局どうか。

事務局

後半の方のコミュニティ・スクール等の事例は多々ある。県外の実例でもそこが注目され、優良PTA表彰の実例として上がってきている。これらの事例では、PTAが感じている大きな話題として上がっている、負担感や役員の仕事分担についても、コミュニティ・スクールにすることによって、負担軽減に繋がっているような事例もある。取組が充実するような内容もあったので、そういった内容も盛り込んで、学校や教育委員会等への提言にできると思う。

もう一つ、もっと絞ったほうがいいのかという視点で見ると、前回会議で全体像、親の課題は何なのか、不安感は何か示したが、それを解決することを目的とした取組は少なく感じた。ただ、この事例を見ていく中で気付いたことは、スマホサミットが一番わかりやすいと思うが、今、子どもの課題として、学力と家庭学習の問題、生活時間スタイルのこともある。そういった子どもの課題を、第1回会議で、解決するための親の学びは何なのか、どう学びを届けるのか御指摘いただいたところだ。スマホの問題というのは、親自身の課題、例えば、大人のスマホのマナーということも課題としてあげられている。そういった同じ課題を子どもと一緒に学んで行く場として、例えば、学校の参観日や、学活などがある。先日、参観日に見学に行くと、スマホについて授業していた。それに親も混ざり、子どもと一緒に親自身も学ぶ場というような場面があると、親の集客力は高くなり、親も学び、子どもも学ぶことができる

。これはスマホの例だが、他県の事例を見ていくと、地方創生について郷土愛を育むような、現代的な課題について学習していた。子どもも当事者として課題を捉え、親も考え、地域のことについて課題を一緒に考える場を学校内、学校外で行うというのは、やり方としてはすごくメリットが大きいと感じている。

委員

なんとなく、イメージができています。しかし、結局、最後に行き着くところは、児童虐待やネグレクトなどで、そういった問題が増えており、子どもの教育的なことを親が放棄したり、あるいは元々働いていないのに少し働いているようにして保育園に子どもを預け、放課後は学童に預け、公的な施設に、子どもを育てることを丸投げしたりしている現状で、家庭の教育力が低下しているような気がしている。もう少しPTAなどを通して働きかけをしていくということを、はっきりしていきたいと思う。

会長

非常に重要なところだと思うが、家庭教育だと親の学び、10ページのような分類は重要だということ。多様になり、捉えにくくなってきている実態があり、このように整理を試みるのは非常に重要と思う。ただ、その取組に参加していない人はどうするのかは、11ページにあるような視点も関連してくる。そうすると、より福祉施策とも近づいてくるということにもなるが、社会教育なので教育のことになり、10ページの分類が中心にはなる。しかし、11ページの視点も忘れずに、研究、まとめていくという考え方・捉え方であると思う。

その他、何か意見や質問などはあるか。

委員

この10ページの分け方だが、こういう見方もあるのかと勉強になったが、補足の別添資料を含め、AもBも立派な活動だ。AもBも出来てないところがたくさんあるというのが現実ではないかという印象もある。CやDの方に行けばいいが、AやBも立派なんじゃないかというような印象を持ったが、そういう受け取り方でよいか。

事務局

どれも重要である。実際に出来ているかどうかというと、それぞれの地域の実情に応じて、Aが充実しているところ、公民館等の活動で、Bが充実しているところもある。また、その逆も当然あると思う。CやDと一緒に学んだ方がより効果的な、スマホの問題や、地域課題などについては、AやBの学び教える、教えられるといった関係になるような学びのスタイルではなく、一緒に学んだ方がより効果的な学びもあると思われる。テーマによってはそういう使い方もできるのではないかと。

委員	4つのグループ分けを意識しながら考えていくのか。
会長	CとDは協働活動、子どもと大人が協働していくものだ。AとBの方は子どものために親が学ぶというか、保護者や大人が、子どもへの支援活動みたいなものをイメージしている。支援をするときに、今までの仕事や経験を生かして支援するという活動もあれば、「今度支援に行かなければならないので、学び直さなければダメだ。」というものもある。今までの仕事などを活かして支援することは、岡山でも多くの学校で行われている。しかし、意図的に学んで支援していくときには、グラデーションが付いてくる。そう考えてみると、少し整理も出来るかなと思っている。考え方としては、大人が子どもを支援するんだという発想に固まってしまうと、一緒に学ぶという発想が非常に弱くなると言えるのではないかと思う。
会長	協議内容に移っていきたいが、次の(1)協議事項、骨子(案)について、今までの整理を踏まえて事務局から提案があるので、説明をお願いしたい。

○「骨子(案)について」

関係資料により事務局が説明

会長	先ほどまでの説明を踏まえて、このような骨子案で研究を進めていこうということだが、意見等あればお願いしたい。 先ほどの家庭を巡る状況を踏まえた上で、学校を中心とした家庭教育支援の取組という整理が必要で、10ページの(1)のような整理になると思う。一方で、支援が必要な家庭に対する対応に関しては(2)で、こちらについても触れていくという整理の仕方になると思うが、いかがか。
委員	最終的に提言を出すわけだが、その提言が出た後、県は、具体的な事業にどう進むのか。この提言の向こうに何を見ればよいのか。
事務局	当初、第1回の会議では、人生100年時代で学び直しは、いつでもどこでも学び直しできるということで、社会教育施設を取り上げ、具体的な施策案のイメージを説明した。しかし、協議の流れで、対象が「現役世代」から「大人・親の学び」になり、今日4つの枠の中で整理をしてみた。その良さも伝えながら、それぞれを充実させる取組を施策化して、考えていくという流れになるかと思う。どのタイミングで、どうなるかは、今後、教育庁の他課と連携しながら協議していくことになるかと思う。 また、前回、2年前の社会教育委員の会議と同様に、冊子を出せたらと思っ

ているが、教育委員会への回答し検討する。

当然、教育庁内、市町村等関係機関には、この冊子を配布するとともに、県の教育基本方針や計画などの中にも準じた形で載せ、連携を図りながら、当課がこの提言を元に、新規事業を考えていくきっかけづくりになっていけばと考えている。

委員

人生100年時代への対応という大枠があって、その中で学校教育を充実させたいという課題がある。それをどうやって融合させていくかという問題がある。その場合、できればこのCやDのタイプで、親と子どもと一緒に勉強していくという所に、もっと意識を向けようという話であり、AやBをやる場合にもグリーゾーンの中で教えるために勉強するということ意識しようと、そういうことなるか。

会長

対象に応じたこの研究の伝え方であるかと思っている。一つは、社会に開かれた教育課程だ。子どもたちが学び、理科・数学のように一つ答えが出せるという時代ではなく、最適な答えを、「ああでもない、こうでもない」と、すぐに解決できないようなことを話し合っ考えるということが非常に重要になってきている。環境問題やスマホの問題など、すぐに答えが見つからない、そういうものを親と一緒に考えることが、子どもの学びにとって非常に重要だということで、学校現場でも親を教育資源として手伝ってもらうだけではなく、親子と一緒に学び、答えはすぐに出ないかもしれないような学習機会を作っていくというのは、社会に開かれた教育課程という点でも非常に重要である。この事例が少ないということで、学校現場に伝えることができるのではないかと、そういう提示の仕方もあるのではないかとと思われる。社会教育施設に関しては、学校外のカリキュラムとして、もう少し協力できるのではないかとアピールしてもらえばと思う。

もう一つは、こういった取組を、どうやって先進事例として作っていったのかというプロセスが気になる。こういったものは、いきなりできたわけではなく、学校や保護者や社会教育施設が、どうやってプログラムを作ったのか、そのプロセスが知りたい。できた結果だけではなく、どういう意図でできたのか。

また、プロセスを考えてみると、大人同士が協議しなければならないようなプログラムになっており、大人同士が協議できる場としてコミュニティ・スクール（学校運営協議会）が非常に重要になってくる。岡山県内においても、こういった大人同士が協議できる場として、コミュニティ・スクールの促進としてアピールに使えるのではないかと。

今、思っただけでも3つぐらい出た。研究したことを踏まえて、それぞれの機関にあったアピールができるかなと考える。まとめたものをどう活用し、ど

うアピールしていいかということは、また御相談させていただきたい。

会長

例えば、岡山市はすでに地域協働学校ということで、全ての学校はコミュニティ・スクールということになっている。

そのコミュニティ・スクールも、非常に活性している地区もあれば形骸化しているところもあるが、そういう制度の振興にも、大人同士で協議する場が必要だとして活用できるのではないかと。この分け方の整理も重要だが、どうやって取組を作ったのかということを考えてみると、それぞれ大人同士や、先生が中心になり、あるいはPTAが協議しながら作り上げたのではないかと、そこが重要かと思われる。

委員

その方がわかりやすい。

今回の子育て世代の親の学びというのは、選んで、選んで、生涯学習全体、社会教育全体を考えた中で、このテーマを選んだのか。

会長

そうだ。

委員

コミュニティ・スクールというものがあり、地域、町内会があり、人の繋がりが弱くなっているというのはよく聞く。地域に開かれた学校などの方が分かりやすい。

会長

全てが教育問題なので、繋がり理解した上で全体の話になると、非常に大きな話になる。大学のテキストみたいなことになってしまうので、どこかに注目してみるという点で、大人の、特に保護者の学びに注目しており、コミュニティ・スクールという考え方の中でも関連してくることだと思っている。

委員

PTA活動というのは、今、壁にぶつかっているところがある。どうしてぶつかっているのかというと、積極的に参加しない人も多いということと、前年のことをそのまま継承しようとしていることなどがある。このような新しい活動のヒントなどが上手く伝わっていない。これらをPTA等にし、活用し区分をしてみることは大切だ。

PTAの役員は、どんどん替わっていて2年ごとくらいでほとんど一新されてしまう。

また、学校が事務局をしていることが多く、その学校の先生や、学校の職員の在り方、考え方をこういったもので少し柔らかくすることで、人材育成していくことに繋がるのかもしれない。教職員の公務についても、こういう活動を通して、考え方を広く持っていくことにしたい。

もう一つ、PTAというのは大人の人生の中での、社会教育、地域活動への

デビューの場となることが多い。PTAで地域の活動を行い、本格的な地域コミュニティを背負っていく人達が育っている。しかし、今、なかなか動きが鈍くなったPTAが、こういった活動で少し活性化され、経験した人達が地域社会で活躍していくことは、大きいポイントだと思う。

このような視野を広げていくことであるとか、考え方について、この提言をもとに提案をしたいと思っているので、わかりやすく発信できるとよい。

会長 最近ではポンチ図でまとめて、それぞれの対処に合わせて、提案やアプローチができる。そのあたりは工夫して、まとめたものを効果的に進めていけるようにしたい。

委員 100年時代が来ようが来まいが、今のPTAの在り方や、学校の教育の在り方というのは、深刻な問題として突きつけられていて、お父さんお母さんが勉強するという様子も含めて、地域、学校の外の人と一緒に、学校運営を経営していかなければならない。しかし、その際に100年時代に常に勉強していくという大枠に上手くフィットさせれば、時代の要請だという形で意識が高まりやすい、意識を変えるための、ある意味道具として、100年時代を上手く活用し、政府の大きなキャンペーンに乗って、大事な学校を改善していくという考えでよろしいか。

会長 全体的にはそういうことだと思う。ただ、100年時代、生涯学んでいくためには、学校教育という基礎段階は、非常に大切な時期だということは理解する必要がある。大人になって、公民館などに参加している人、学んでいる人を研究してみると、非常に学歴が高く、収入も安定した人ほど参加していて、そうでない人はかえって逃げていく。生涯学習することによって、かえって差が広がるという傾向がある。学ぶことを嫌がる人、学んでない人に注目して見ると、小・中学校の時にいい思い出がないということになる。生涯学習の人生100年の計を立てていくには、義務教育段階が主体だと、その学校教育の時に豊かな学びや、地域の大人と一緒に活動し、学ぶことが生涯学習を進める上でも大切であると思っている。

副会長 その辺りが、はじめにわかりやすく書いてあるとよいのではないか。

委員 親が学ぶとか更に勉強させるとかより、親がもっと学校のことを気にすることが大切。要するに先生方に丸投げするのではなくて、機会がもっとあることが大切。例えば、学校の経営に参加するというのは言い過ぎかもしれないが、そういったイメージを持つべきことが大切ではないか。

副会長 一緒に考えようということか。

会長 そうだ。

委員 保護者世代に話をしたとき、「家庭教育支援」という言葉は嫌がられる。そんなの必要ないという。

会長 なるほど。

委員 「家庭教育」を支援される必要はないという人も多い。

委員 高校の魅力化のコーディネーターをしているが、大学の受験が変わるとか、高校も中学校も小学校もだが、教育の中での学びが大きく変わるといわれている。それは社会に求められている人材が、私たちが言われていた頃から大きく変わっているから。その社会が大きく変わっているから。こういう力を付けなれないといけないと、学校は社会の出口が近いところほど敏感で、変わっているが、一番遠いのが家庭だ。

私が苦戦しているところは、明確な答えのない問いや、答えの出ない社会を生きていかなければならない中で、何の力を付けなければいけないのか分からないことだ。自分たちが育ったようにしかやっていないから、高校側が学校行事の中で、そういうものを入れて、これが高校の魅力ですと言ったとしても、親が選ぶのは、いい高校行って、いい大学行って、いい会社が待っているという頭があれば、進学校の内容がどうか、別にどうでもよい。偏差値で選ぶという親がまだまだとても多い。それが良い悪いの話ではなく、だからそのことを学ぶ場をもっと作ってもらいたいなど、出口に近いところほど思っている。しかし、学校が家庭の立場に立って説明することはできていないので、たぶん親は知らない。なぜ小学校でふるさと教育が始まったのか、そもそも自分の住んでいる地域がなくなるかもしれないのはなぜだろうかなど、親は考えられない。毎日暮らしている、今あるものがなくなるということが、たぶん想像すらできないと思う。時代はユーチューバーが仕事になるぐらい大きく変わっているということを、自分の子どもから学ばなければいけない部分がある。このように、大きく時代は変わっているということさえも考えられていないので、親自体がPTA活動や学校教育の中で、理解できることが大事ではないか。

すでに、ここで書かれているように、CとDの中で用意されているにもかかわらず、それに参加をさせなかったり、自分が参加しないのは、この先にこういうのがあるのがわからないから。ただ無駄だとか、それするぐらいなら休みはゆっくり休みたいとか、塾に行かせたほうがいいんじゃないとか、自分が生きてきたやり方しか知らないなので、そこを充実させてあげることを、盛り込

んでいけば、こういう学校行事や地域活動などは意味があるから行かせようとか、塾に預けようではなく、親子の会話が、将来子どもにとって必要な力になっているかもしれないとか、そういうものに結びついていくべきだ。先ほどの、「なぜ、これを学んでいるのか」「なぜ、これをやっているのか」というのは、当事者がすっぱり抜けているので、せっかく用意されているのであれば、そこを結びつけていけるようなポイントをお願いしたい。

委員 塾に行かずに、どうしたら、そっちへ行ってもらえるかは難しい。

委員 時間がかかると思う。その説明自体がないままなので、そこを考えていけないと思う。

会長 今の話は重要だと思う。ただ、自分も子どもを持つ世代で、自分の時の感覚で子育てをしてしまう。それは、いい高校に行って、いい大学に行って、いい会社に入るということが、一つの答えだと染みついた世代であるから。結局、そういう親が変わらない。そこは良い悪いではなく、一つの価値観だけではなく、多様な選択肢があるということを理解する必要があると思う。しかし、今の親の世代は固定的な発想があり、それは今の疑問に繋がる。どうすれば多様な選択肢があり、自分の考え方が非常に狭いと気付くことが出来るんだろう、どうしたらいいんだろう、それをどう支援するかだと思う。

委員自身、こんな支援や、考え方がこう転換したという、何かきっかけがあるのか。そのあたりがヒントかと思う。こういうことは誰かに教えてもらってというものではない。

委員 大きく2つだったが、自分も進学校に行き、とりあえず大学に行き、「女の子もこれから4年制の大学へ行かないと仕事が無いよ」と言われて育ったので、普通科に行くのが当たり前だと思っていた。見方、考え方が変わったのは、一つは「先」を学んだこと。今のこの社会教育委員に参加したことは大きく、自分の生活にいっぱい活きる生き方ではなく、社会の構造を学んだこと。例えば、経済界の人と話をする中で、人材不足と言っているが、「人」はいて「欲しい人」がいないという話を聞いたことは大きい。また、教育関係の話を聞くと非認知能力というワードが出て、幼稚園で先生が言っていたけど、何でそれをやっているかなど、いろんな情報をいろんな分野から学んだことで繋がった。

次に、子どもの地域活動を支援していく中で、子どもは答えを与えることよりも、答えがないことをさせた方がものすごく伸びるということ、自分が支援する側で見ていると感じた。学校教育で伸びている部分と地域で伸びている部分の力は全然違うということを見たということも大きい。

この2つ、情報という事で学んだということと、子どもという存在の在り方というのを見たとき、見方、考え方が変わった。

委員

私は反対に、学校が変わる方がいいと思う。私は息子に「しなくちゃいけない」と言うと、息子は「なぜ」と言う。「じゃあ先生に聞いて」と言うと、なぜ点数を取らなければならないのか先生もわからない。どちらかというところにはめているのは学校かな。でも先ほど言われたように、「塾に行かずに活動に行きな」というのは、私はできない。とりあえず「勉強しといて」と言う。でなければ息子自身が困ると。息子は困ることが想像できていない。私はそこを想像させてくれる先生が欲しい。私が言ってあげたいけど、「とりあえず塾に行って」となってしまうのが現状。息子は、どこに進学しようかって迷っていて、「何で高校行かなきゃ行けないの」って言っているが、「じゃあ百万円稼げるんだったら行かなくていいよ」と言うと、それをどうやって稼ぐというのを、先生は教えてくれない。親は、どうしたらいいのかな、どういうふうに言ったら育つのかなと、いつも悩んでいるところだ。子どもには勉強の意味がわかっていない。それを教えるのが、親であり地域の人達である。中卒でも生活している人はいるし、大企業の社長になっている人もいる。そういったところは、学校も変わらないといけないと思う。

会長

非常に深い、大切な話じゃないかなと思う。それは「大人の学びって何」ということにつながってくると思う。一言で言うことは難しいが、提言の中で大人が学ぶことの意味ということに関しては、少し触れてもいいと思う。それは子どものためというだけではなく、自分の為にも学びが必要で、なかなか一人では難しいので、他者と関わりながらということ。その他者は、もちろん大人同士ということもあり、大人と子どもということもある。そういった学びの意味ということも少し触れることができればいいのかと思う。

委員

なぜ学ぶのかということと一緒に考えればいい。一緒に考えようという姿勢を持つような。

会長

道徳は、一つの答えがあってというものではなく、ジレンマ教材みたいな形で、ジレンマを生むような、答えが一つではないという、それは子どもと大人が、「ああでもない、こうでもない」というようなことをしながらで意外と簡単なよう授業する教師の方は難しい。答えがあった方が教えやすい。ただ、多様な価値観を、親が入ったり子どもが入ったり、どうそれを繋げていくか、教師としても力が必要となってくる。

委員

大人は、「わからない」「見えない」はダメといった特徴がある。私が面白

いと思ったのが、岡山市の芸術交流という現代アートの作品展があったが、そこで、子どもがリードし、子どもが案内し、大人を連れて行って「これどう思いますか」というようなことを言いながら話していくのだが、大人は知識を総動員していろいろなことを言おうとするが、そういったときに子どもは全く違った反応を示す。「これって暗いよね」と言うと「いや、僕は明るく見えるよ」など、そういう議論を展開していく中で、つまり答えはない、そういうのは新鮮だった。

絶対答えを出さなければいけないこともあるが、答えが出なくてもいいものもあり、いい教材で面白いと思った。

副会長

学校等で、人権などについての話をする機会があり、生徒や児童に対して、「正解がないものだと考えてください」といっている。学校では正解を求める。学校というものは、そういう特性がある。どうしても正解を求める。学校の先生もおそらく正解のある方に導くという、そういう考え方があるのかな。

会長

学校も新しい学びということに対応して変わっていかなければならない。ただ、大人になって必要なもの、基礎的な知識ということを伝授していくことは変わらないから、それは学校教育の限界でもある。メリットでもあり限界もある。だからこそ社会教育という場が必要になってくる。学校に全てを求めていくというのも、これは酷なことだと思う。学校も変わっていかなければならないが、学校は学校の意義がある。変えてはいけないという所があるから、学校にできないというところが社会教育という視点で、特徴ではないか。

先ほどの「答えがない」という学びは、学校教育よりも社会教育の方が得手なわけだから、そういったことを連携していかなければならないと思う。このあたり学校は何か、社会教育は何か、話が深まってくるが、研究の方に戻っていくと、今までの話を踏まえると、この進め方、この骨子ということに関しては、この方向でいいのではないかということで、共有できたと思うがよろしいか。この後の協議事項で意見いただきたいと思うので、この骨子は概ね了解いただいたということで、次の資料7の方に移りたいと思うが、よろしいか。

○「御意見をいただきたい内容」

関係資料により事務局から説明

会長

補足ということで何か意見とか。

委員

意見ではないが、参観日は、子どもが教えてもらっているのを見てというの

は、経験があるが、先ほど言ったように親も全部入れて「何で勉強するのか」など、ディスカッションのようなことはやっているのか。

事務局 親子道徳の日などのような取組は、そのような取組ではないかと思っている。

委員 実施の方法はどのような方法なのか。

事務局 やりやすい方法としては特別活動として外部人材の活用だが、NPOと連携して世代間交流をやっているような取組もある。これは、親だけではなく地域の大人が加わってやっているようだ。よく似た取組は、狙いとして現代的な課題を、親も子どもも、場合によっては、地域の人も入って展開することはあり得るのかなと思う。

委員 先生が、ファシリテートするのが難しいのではないか。

会長 それは、親をファシリテートするというのは、子どもを授業するのとは違った力が必要となり、そこが上手くできないという教師がいる。教師は教えたいためですから、好きなように話すということを手よくコーディネートすることは簡単なようで意外と難しい。

会長 今の話で、特徴や一緒に学ぶことなど出てきたので「学ぶことの意味」などは、しっかり書いた方がいいかと思う。また、この4つの分け方でおもしろいと思っているが、平面ではなく、実は子どもの発達に合わせて違ってくると思っている。小学校低学年や中学年などは支援で、大人が子どもに何かしてあげる取組になる。それはそれでいいと思う。しかし、子どもが小学校高学年や中学生になると、一緒に協働できるような学びに変えていく方が、子どもの発達にいいのではないかと思う。そして、中学生、高校生になり、こういったプログラムの企画にも中高生が参画する。これは以前の岡山県社会教育委員の研究でも、「中高生の出番づくり」というものがあるが、そことも連動してくる。

このように、これは平面になっているが、子どもの発達に合わせて取組の、重点をシフトしていくことも必要なのではないかと思う。

このあたり、実際子どもと関わってみてどうか。小学生や高校生などそういった発達に合わせて変化させていく必要があるのではないか。

委員 個人差はあると思うが、親も含めて小さいときにいろんな活動したり、地域の人と関わっている子どもは、中学校に入ったときに活動の幅や考え方も全然変わっていたりする。同じ内容をやっていても、小さいときの体験によって、

差があると思う。勉強でも、地域活動をやりだして、もっと勉強が出来るようになった子がいたり、逆に、ほとんど勉強に興味がなかったが、公民館の活動にだけは行っていたという子どもが、何かのきっかけで勉強し出すとか、関連していると思う。

会長

先ほど皆さんからいただいた、親の学びの特徴や一緒に学ぶ効果、学びの意味など、子どもの発達に合わせた取組ということも踏まえて、まとめていくことができたらと思う。引き続き意見や、取組の紹介などがあれば、事務局まで連絡してほしい。

研究の骨子や中身については、委員の皆さん方と共有できたと思うが、この研究のタイトルは、明確に決まっていない。そこで、現時点での案を事務局から提案する。

○「・研究の表題について」

関係資料により、事務局から説明

委員

核となるのは学校だけではないが、学校を核とした方がわかりやすい。

委員

ここで求めている結果としては、子育て世代の親の人達が当事者意識を持ち、「私たちがまずやるんだ」という所を持ってほしいことが、一番望む結果だと思う。ここで、学校を「核、核」と言い過ぎると、「学校が何とかしろよ」という方向に行きそうな気がする。しかし、特に参加が困難な保護者への対応、様々な課題を抱えたりしている家庭については、福祉関係とも一緒にやっている。子どもは毎日学校に来るので、それをよく見ている学校がずっと核にならなくても、最初は窓口になったり、情報の発信基地であったり、学校を通して福祉と連携を取るとはどうしても必要で、プラットフォームということ。だから、あまり学校を核としたと言わず、学校が情報の中心にいないといけないことは確かだと、わかるようなタイトルがいいのではないかな。

会長

最初の骨子案の所には、「学校に焦点をあて」と書いてあるが、学校が核になると、どうしても学校がしなければならない。文部科学省、中教審の地域学校協働の答申の委員として参加した時に、学校を核とした地域づくりというと、「それも学校の役割なのか」、「先生がもっと大変じゃないか」という意見があった。正確に言うと、「学校という場」を核としたというようなこと。学校を核というと、学校が子育てもしなければならないということなりかねない。

委員

「親が子ども・学校・地域と一緒に学ぶ」としてはどうか。親に意識を持つ

てほしいということで、一番の主が親で、学校も入れたいが地域も入れたいという話だったと思う。だから、親が子ども・学校・地域と一緒に学ぶ取組の推進としてはどうか。

会長 「子育て世代」は付けないか。

委員 それは、長すぎたから。「子育て世代」はなくてもわかる。

会長 その3者がということか。

委員 そうだ。親が主体。学校も関係者。

会長 そうなってくると、学校だけが人ではない。それが並列にあるということでは、家庭、地域ということになるのではないか。学校を教員に置き換えると、それもおかしい。なかなか難しい。親となっているが、本当に親でいいのか。保護者という言い方がいいのかということは、事務局の方でも考えてもらいたいと思う。

委員 大人はどうか。

会長 学校に関わる大人というものもある。

委員 大人は人だが、学校は場所、「場所×場所×場所」で、「家庭×学校×地域」にするのか、逆に「親×先生×地域の人」みたいにしないとおかしいことになる。

会長 そういう3者の学びが必要だというタイトルにし、サブタイトルで保護者や親、子育て世代の親に絞るとか、その逆もあると思う。その中でも、親、保護者に当事者意識を持ってほしいということが重要。サブタイトルの方で大切なのはこの3者のというところが表面に出てはどうか。

事務局 3者を上手く表現したタイトル。サブタイトルを子育てに絞ったような表現にすること。

会長 そんなところで、検討してもらえたらと思う。

会長 次に、今後のスケジュールについてお願いしたい。

○「・今後のスケジュールについて」

関係資料により、事務局から説明

会長

こういうスケジュールになっていくが、委員の皆さん、協力をお願いしたい。委員の皆さんと話をしてみても、違った仕事を持っていたり、違った世代の人の大人同士の学び合いというのは、今日の話を知ると重要だなと改めて思った。どうしても目の前の子どもを何とかしてあげようという事で、学校の先生も保護者も思ってしまうが、中長期的な視点で大人の学びとは何だろうか、人が学ぶとは何だろうかということも、話し合えるようなゆとりがあればいいと思う。学校のPTAの方でも、スマホなどの対処的な課題、大切ではあるが、中長期的な大人の学ぶ事の意義など答えが出ないが、そういうことを親同士で話すなどという支援も必要かということを感じた。

皆さんの御意見を踏まえて、事務局と相談しながら進めていきたいと思うので、引き続きお願いしたい。

最後にその他、(1) 令和元年度の主な事業の進捗状況を事務局から願います。

○「3 その他 (3) 令和元年度の主な事業について」

公民館等を活用した夜間学び直し推進事業について、事務局から説明

会長

何か意見、質問等があれば発言してほしい。

委員

外国人を対象にしているが、内容や対象はどうなっているか。

事務局

チラシに、学習内容は小・中学校の学び直しと記載しており、国語・算数・英語を中心とし、対象は、事情により中学校を卒業していない方などとしています。家庭は、小・中学校の時不登校だったため、実際には卒業しているが学び直しをしようとしている方、現在不登校で学校教育も行けず、新たな学びの場として来ている方もいる。外国人の方については、当初イメージしていたものは、日本に来て結婚し、子どもが学校に行っているが、子どもの教科書が読めない、わからないという場合に支援するイメージだった。外国人で日本語の小・中学校の学び直しをするので、日常会話ができないと、別の講師を呼ぶ必要があるため、日本語で会話ができるということを条件に取り組んでいます。ただ、日本語講師を呼ばれている市町村もあり、外国人就労者も来て、日本語に慣れるための勉強も込みでやっている。

委員	夜間中学があるというのは知っているが、夜間小学校というのはあるのか。
事務局	夜間小学校というのはない。この事業は裏面として、義務教育課がやっている中学校夜間学級の調査研究委員会との連携があり、参加者に中学校夜間学級を希望するのか調べている。この事業は月1回とか2回と言うペースだが、中学校夜間学級となると、毎日の授業となるので、そこまでは難しいという方がいるなど、実態について義務教育課と連携しながら進めている。
委員	小学校の卒業資格を持っていない人が、そこの勉強したいという時には、どうなすのか。
会長	夜間中学校の中で、小学校の授業からやっ払いこうというのは実質的にある。夜間小学校という名称はなく、夜間中学校の中で、そこも含めて支援していこうということになっている。

○「(2)その他」

会長 閉会	(2)その他に移るが何かあるか。特に何もないようであれば事務局にお返しする。
----------	--